

北の富士もびっくり 誰もが予想できなかった・・・  
大相撲観戦雑記（平成28年九月場所篇）

< 1 > 豪栄道の全勝優勝

下馬評にも上がらなかった落ち目の大関が、何と全勝優勝をしてしまった。NHK 相撲解説の北の富士さんも舞の海さんも初日の予想に取り上げもしなかったし、千秋楽には驚きの終幕という感じの話しぶりだった。前半の五日間の相撲を見る限り、前場所の相撲との大きな差異は感じられなかったが、中盤から表情が変わってきて相撲のスピードも上がってきた。これまでの悪癖だった「攻め込まれたら引きと叩きで対応」と「思い通りの四つ身になれないと首投げに出る」という墓穴を掘る型の相撲が消えて、前に出ながら手早く攻めていく相撲が目立つようになってきた。さらに、立ち合いに素早く前みつを取って前進して行く速攻相撲も出て来るようになり、やがてそれが止まらなくなってきてしまった。

とは言っても悪癖は体に染みついているようで後半の相撲で数番見られたが、すぐに思い直して我慢して攻めに転じていた。関脇時代から精悍な勝負師の顔つきを持っていて、先を期待して見て来たのだが中々良い結果が出せなかった。かと言って、これで一枚皮が向けて成長したと見て良いのかどうかは不透明。

これでまた相撲協会もマスコミも「綱取り」騒動に入ってしまう、横綱審議委員会の主要メンバーが「過去の成績はあまり拘る必要なし、直前二場所の成績だけで評価」とまで発言し始めた。

新横綱が誕生することは喜ばしいことではあるが、「日本人横綱の誕生」に異常に拘り過ぎて我を失っているように見えてならない。決して足を引っ張ろうなど思っている訳ではないが、データを見て冷静に対応せねばならぬことも述べておきたい。（下表：豪栄道の大関在位期間の勝敗記録）

H26-9	H26-11	H27-1	H27-3	H27-5	H27-7	H27-9
8-7	5-10	8-7	8-7	8-6-1 休	9-6	7-8

H27-11	H28-1	H28-3	H28-5	H28-7	H28-9	大関在位記録
8-7	4-11	12-3	9-6	7-8	15-0	108-86-1 休

現時点での直前六場所（一年間）の記録は55勝35敗（勝率0.611）、マスコミの騒音を参考にして来場所も全勝優勝したとしても、62勝28敗（勝率0.689）。大関昇進後の成績を合算すると108勝86敗1休（勝率0.554）となる。合計や平均で見ればばかりではなく、大関在位期間中の成績のばらつきにも注目して見れば一目瞭然「時期尚早」と見るのが正しいように感じる。あと二場所ほど見てからの判断の方が望ましいように思う。稀勢の里に対してあれほど厳しい条件を突き付けて、しかも「綱取りはご破算」とこき下ろしたにも関わらず、この浮かれぶりには驚くばかり。

< 2 > 殊勲賞 隠岐の海

二横綱・三大関を破った隠岐の海に早くから「殊勲賞！」の声が上がっていた。この力士はこれまでに何回も「横綱大関を破ったにも関わらず負け越し」という偉業を成し遂げており、私の予測としては負け越すだろうと見ていた。結果として14日目によりやく勝ち越して辛うじて受賞に漕ぎ着くことができた。

これまでの例を見ると、殊勲賞は「優勝争いに大きく関わり場所を盛り上げた」または「優勝力士を破った」場合に授与されることが多かった。隠岐の海は優勝力士（大関豪栄道）には負けているし、中日までは7勝1敗だったがその後5連敗して優勝戦線からは早々と脱落している。おまけに破った二横綱三大関の内横綱鶴竜・大関照ノ富士はよれよれの状態で、大関琴奨菊はカド番でようやく9勝を上げた程度、殊勲の誉れがあったのは横綱日馬富士に勝った星だけではないか。今場所の殊勲賞には異議がある。

### < 3 > 技能賞 遠藤

立ち合いの素早い踏み込み、膝がよく曲がって安定した腰の構え、低い位置から前みつまたは浅い位置のまわしを取る、脇を締めておっつけや相手の差し手のブロック、休むことなき前進圧力、見ている気持ち良くなる教科書通りの相撲が見られた遠藤の土俵は素晴らしかった。白鵬なき場所、こういうきれいな相撲を見せてくれる人はあまりいいない。怪我による長い低迷から脱したことを強く感じさせる場所だった。

幕尻近くの東前頭 14 枚目まで落ちてしまったが、13 勝 2 敗で逆襲開始。

来場所は前頭上位に進出して横綱・大関戦があるので楽しみである。

### < 4 > 敢闘賞 高安

東の関脇高安は派手な動きはなかったが、攻められても落ちついて裁く相撲で 12 日目まで 10 勝 2 敗。例によって報道関係者や相撲協会の関係者は「来場所が大関取りの場所になるだろう」と浮足立った。ところが 13 日目から下位の力士に 3 連敗で 10 勝 5 敗に終わった。両横綱と不調の二大関に勝ちましたものの、今ひとつ「華」がない場所だった。

三役に定着しての 10 勝 5 敗は一応の評価の対象ではあると思うが、本当に敢闘賞に相応しい内容だったのかと考えると少々首をかしげざるを得ない場所だった。

### < 5 > その他の活躍力士

自己最高位西前頭 5 枚目まで躍進した御嶽海の相撲が光っていた。おっつけとハズ押しで攻め続け、逃げたり跳んだり叩いたりはない実直な相撲が目立った。着実に力をつけてきているようだし、稽古で鍛えてパンパンに張った筋肉で構成された体から繰り出す力は頼もしく見えた。大方の予想では 7 勝 8 敗か 6 勝 9 敗ぐらいで跳ね返されるだろうとの読みが強かったが、見事に裏切り 10 勝 5 敗の好成績を上げた。

将来への弾みを付ける意味も含めて、御嶽海が敢闘賞をもらってもおかしくないなと思っていた。

終って見れば 8 勝 7 敗・9 勝 6 敗の力士が何人もいるが、相撲っぷりでこれほと思う力士は他にはあまり見当たらない場所だった。

### < 6 > 十両の土俵から

今場所も宇良・石浦などの小型力士の活躍に拍手が多かったが、アキレス腱を切って外科手術を受け西十両 10 枚目まで下がった安美錦への拍手はさらに大きかった。下に後 4 枚しか残っていない地位で緊張の毎日だったに違いない。7 勝 7 敗で迎えた千秋楽、英乃海を叩き込みで破り勝ち越し。40 歳間近の体で、ここから巻き返しが始まると期待しているが、数場所後に再入幕できるだろうか？熱烈なファンの一人としては期待半分・折り半分の日が続く。相撲に味が有り、取組が終った後の語り口にも味が有る、数少ない逸品の力士である。

### < 7 > もっと下を見ると

幕下以下を眺めると、耳に覚えのある四股名が散見する。入幕したが跳ね返された若手力士もいれば、怪我で大きく陥落した力士もいる。

東序の口 11 枚目舂ノ山は 7 戦全勝で序の口優勝を果たした。平成 23 年 9 月場所新入幕、突き押しを主体とした相撲で西前頭 4 枚目まで躍進したが数々の怪我により序の口まで陥落してしまった。

まだ 25 歳、これをきっかけに再入幕が果たせる日が来ることを念じて……。

以上